

あとがき

通常何かの贈り物をする、からならず返礼があります。祝儀や弔いの場合も、何かのお返しに戻ってきます。ところが寄進や喜捨は、金品が一方的に移転するだけで、その一部が戻ってくるということはありません。当人もそれは承知していますが、しかし、別のかたちで見返りがあると信じています。

意識のなせる業

それが功德や報酬や贖罪ですが、その量を目で確認することはできません。また廻向をしたとしても、寄進や喜捨によって為した功德の一部が、他に移転して、目減りしてしまうということもあります。功德を分け与えるという気持ちの影響し、これが縁となって、功德の受け手に、そして廻向者にも、あらたな功德が生じるとされます（第二章）。つまりすべてが意識の働きの問題であります。しかし、だからといって、ただ心で念じるだけでは、功德も廻向も実行性がありません。具体的な物財の移動が発生しないと、その効果は生じません。つまり、実際に物を手放すという手続きを経ることが必要です。そして功德や廻向の量は、基本的には手放した財の多寡に比例するといえます。ただし、

その多寡は、具体的な量ではなく、その物が寄進や布施をする人にとって、どれだけ掛け替えの無いものであったかによって決まります。つまり、どれだけ我欲から離れられたか、にかかっています。

すべてが意識とか心とかの作用として説明される功德の法則は、一般庶民にはなかなか理解できるものではありません。そのため徳は、目には見えないが、何らかの質量をもつたものとして理解されてしまいます。功德が多ければ、これが悪徳を陵駕し、最終的に功德が残るということもあります。功德をたくさん為せば、それで悪徳は帳消しになると解釈してしまいます。

現代のビルマ人仏教徒は、死んだら功德だけをもって来世に旅立つとか、功德と悪徳の差といういい方をします。これはタイでも同様です。廻向にしても、自分が為した功德の一部を、そちらに振り向けると理解されています。ですから、これを精霊の地母神（メートラーニー）が運んでくれるという考え方が生まれるし（第三章）、ある意味廻向は、自己を犠牲にした利他的行為として、これを実感することができます。現実には、物の遣り取りのアナロジーで、これが理解されているといわざるをえません。

イスラームの廻向

こうした功德や廻向の観念は、イスラームにもありました（第四章）。ムスリムにとつ

て現世はかりそめで、来世こそが永遠の生となります。そこには火獄と楽園が存在し、そのどちらに行くかはアッラーによる最後の審判で決まる。これが確定するや、未来永劫永遠にそこに存在することになります。楽園に行かせてもらうためには、六つの存在を信じ、五つの行為を実行しなければなりません。

「五行」の一つである喜捨は、アッラーからの褒賞（楽園に行くこと）があることを前提に、お返しを期待できない相手に対しても、財物を与えることです。それには二種類あり、ザカートは「財産の偏在をただすという理念」のもとにおこなわれ、サダカの場合には「何らかの利他的な目的」のためにおこなわれ、対象は貧者・困窮者などです。ちなみに仏教が、聖職者にたいする施与を重視する点で、この点は異なるところです。イスラームの場合、大量の修行者を抱えるということが無いからでしょうか。

ザカートは公的、サダカは私的な行為のようにも見えますが、サダカでモスクを建設する人もいます。また、親族が他者を招いておこなう大きな儀礼で、お金のある人が、費用を負担しこれを主催するなど、サダカもまた富の再配分という、ある意味「蕩尽」と同じような社会的意味もあるようです。そして死者の罪が許されるようにと、その家族や親族が、参列者に布を配ることによりサダカをおこなったり、死者のためにクルアーンを朗唱し喜捨をしたりすると、それは行為者本人のみならず死者の善行として記録されるというのは、廻向の觀念によく似ています。何れにしる、物の転移が伴います。

このようにイスラームの場合、仏教の因果応報という考え方は、アッラーの思し召しにとつて変わられます。また善行や悪行は、各人の両肩にいる天使によつてすべて記録され、死後これがアッラーに報告され、来世の存在が決定されるというのも仏教とは異なるところです。しかし「己が心の貪欲にどこまでもうち克つて」なされるザカートもサダカも、現世における見返りはないが、これは善行とみなされ、アッラーによる最後の審判で来世、つまり永遠の生において樂園に行くことが保証されるということ、ザカートやサダカが促されるところは、仏教とあい相通するものがあります。

そして何より、死者に対してサダカを届けることはできないが、死者のためとしてサダカをおこなうと、これに対して喜捨をした本人にアッラーからの褒賞が与えられ、かつ死者も報酬を得ると信じられるというところは、アッラーを介して、仏教という廻向がおこなわれているとみることでできます。この報酬こそが、仏教のいう功德であり、廻向によつてなんら目減りすることもなく、施主にとつてはさらなる、受け手にとつては報酬によつて結果するということになります。この考え方もまた、寄進や喜捨、つまり私欲に打ち克つ行為をさらに奨励するものとなるに違いありません。

個の確立

実はこうした極楽（天国）とか地獄（火獄）という觀念、現世での善行と悪行の審判が、

なん人に対しても平等におこなわれ、そして現世での善行が死後の存在を決定するとう考え方は、紀元前一千年以前に、イランで生まれていたことです（第五章）。「人は誰でも死後において魂の救済を希求し、このための宗教的な仕組みを考えていた」のです。そして、善行の多寡を判断して来世の存在を決定するのは、仏教徒は個人の判断、イスラームやキリスト教では「最後の審判」や「神の恩寵」となります。ただキリスト教のなかにも、異端とされたペラギウス派のように、個人の判断を重視するというものもあつたようです。

キリスト教にある、自分の持ち物を売り払って貧しいに人に施せば、天に富を積むことができるという考え方は、チンの「石叟き儀式」やタイのカティナつまり仏教の功德、イスラームの喜捨に通じるものがあります。物欲を捨てるのが、善行とみなされている点です。ただキリスト教では、これが原罪の「贖罪」として定式化されました。そして「無意識のうちに繰り返される罪過（科）は、喜捨の習慣によつて贖われる」と説明し、贖罪の方法として、施しや潤沢な喜捨が設定されます。そして、これが単なる「蕩尽」つまり「パンとサーカス」としないうためには、これを教会のために使うことが必要であると説かれるようになります。

修道院創建の動きとともに、これに対する寄進は自らの贖罪とともに、一門の死者の魂の「浄福」のためになされるようになっていく。ここには仏教の廻向に似た考え方が

認められます。また贖罪という宗教的実践が、つまり罪の意識を反芻し、かつまたこれを検証せんとする意識が、個としての内面の確立に導く回路を与えたとされますが、これはある意味、自業自得という法則を内面化し、自己の行動を検証し抑制せんとする上座仏教にも通底する考え方であるといえます。全知全能の神を認めない仏教は、個の確立とともにあつたからにはかなりません。ただし何れにあつても、近代的主体はネイション（民族）として立ち現れることになつてしまつたことは忘れてはならないと思ひます。⁽¹⁾

比較の裏返し

仏教であれ、イスラームであれ、キリスト教であれ、思想の底流には、経済的格差のない、平等な社会の実現があつたと考えられます。功德、喜捨、贖罪をめぐり、目には見えないところで働く原理を解説することによつて、これを実現しようとしているように思えます。いずれも物欲から離れることを説いています。この二者を比較するとき、往々にしておのおのの特徴とか、特質が強調されて、違いばかりが指摘されてきました。その結果が、宗教紛争といつてよいでしょう。

同じ比較にしても、外側は違つて見えるが、内容は非常に似ているとして、その共通点を明らかにするという方法もあります。今後は、自らとそれほど異ならない点を他者のなかに発見するという営為を積み重ねないと、争いが無いような世界をつくることは

難しいのではないかと思います。そして、こうした観点からの比較をさまたげ、違いを強調する方向に向かうのは、物の豊かさとともに、ネイションの独自性とこれに対する誇りを追求する社会システムに問題があることを、そのメカニズムを通して明らかにしていくことが必要ではないでしょうか。

註

- 1 上座仏教の個人主義については、伊東利勝2017「南伝上座仏教とネイション」『南伝上座仏教徒と現代』愛知大学人文社会学研究所を参照して下さい。